

湘南医療大学

ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学
保健医療学部看護学科
関谷 潤
作成日:2023年9月25日

1. 教育の責任

本学の建学の理念は、「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」である。

人のふれあいを通して、他者を思いやり、生あるもの全てに感謝し、その人らしさを大切にする教育を実践し、全ての人々の幸せに役立つことを期している。

現在まで自身が担当した科目は、看護学科1年次「基盤実習Ⅰ」、2年次「成人看護基盤実習」、3年次講義科目「成人看護方法論Ⅲ」および「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ」、4年次「統合実習」である。また、これまでチューター、国家試験対策委員会、実習委員会での活動を実施している。実習では学生が各実習目標を達成できるよう、学生の学習や疾患の学習進捗度や理解度を確認しながら、適宜学生を支援している。同時に、実習病院との事前の打ち合わせを行い、学生が自身で考え目標を達成することができるよう実習開始後は実習指導者と連携をとりながら、学生を支援している。そこでは、建学の理念である、「人のふれあいを通して、他者を思いやり、生あるもの全てに感謝し、その人らしさを大切にする教育」を基に学生とともに考え学ぶことを意識している。

また、学内の教育活動においては、学生が大学生活において安全に安心して学業に専念することができるよう支援することを責務として活動を行っている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

教育は、興味・関心を持つきっかけを撒くことと考えている。

「学ぶ」ことの大半の時間は、知らなかったこと、知らないことを学ぶことにあてられていると考える。たくさん勉強科目の中で、教育の大半は、教えられることが特徴であると考え。その「教えられる時間の中で、知らなかったことを知る」体験の中で、何か一つでもわくわくするような体験をすることができたとき、それを期に自ら知らなかったことを調べたり、体験したり、そこから枝葉が分かれるように、学びが広がっていくと考える。

また、学ぶ喜びを共に喜び、楽しんでくれる存在がいることも、学び、興味を持ち続けることに、力を与えてくれるものである。

大学の講義で受けた勉学のリアルを身をもって体験するのが臨地実習である。実際の患者を受け持つ実習は学生にとって学習をはじめ大変なことも多い。しかし、その実習の中だからこそ、真剣に真摯に患者と学習に向き合うことができると考える。こと体験の中で、「看護は面白い、もっと知りたい」と思えるきっかけを作りたいと考えている。

2) 理念をもつに至った背景

自身が看護学生の時に、受け持った患者すべてを鮮明に覚えているわけではないが、中でも自身がずっと記憶に残っている患者は存在する。その時新鮮に感じたことや興味深く学んだことは、臨床で看護師となった際にも、非常に役立っている。学生時代、受け

持ち患者に退院指導を行うことを計画したのだが、「尿が赤い場合は受診をしてください」と書いた。実習指導者は「赤いってどんな色のこと？私が考える赤と、あなたが考える赤は違うかもしれないよ」と話された。指導内容を考えることで頭が一杯であった私にとって、「自分と他者が考えることは同じではない」「他者がわかるように説明するということがこういうことなのか！」と衝撃を受けたのである。そしてその気付きは、疾患を理解する際にも、患者に説明できるためには、どのように説明すれば理解しやすいだろうかということに繋がっていった。そのためには、自身が疾患を正しく理解しなくてはならないのだと実感した。そして、学びに面白さを感じると、学ぶことが楽しくなり、学んだ知識を経験とともにどんどん吸収できる楽しさも実体験をしたことから、上記を大切にするようになった。

3. 教育の方法・戦略

病院実習での学生指導

病院実習時、受け持ち患者に必要な看護援助を学生自身が考え立案することができるよう、立案する内容について、学生自身が捉えられている患者像や学習、今後の方向性をまず確認し把握する事から始める。学生が、何に困っているのか、何に悩んでいるのか、を私自身が理解し、次に学生と一緒に「困っていること、悩みを改善するのに何が 필요한のか」、「次に何が分かれば、不安なことや、疑問や悩んでいることが改善されるのか」を考える。答えを与えるのではなく、「考えること」から、「そうか、こういう時には、こうすればいいのか」「では、次にこれはどうなのだろうか」という発見や関心を広げられるよう学生に関わる。また、学生が実施する看護援助について、事前に確認をし、追加修正することがないか学生が得ている情報や私自身が得ている情報や指導者に状況を確認しながら、援助方法を事前に確認する。学生とともに実施し、援助後に振り返りを行なうことで、学生の気付きを、今後の援助に活かすように関わる。具体的には、学生の気付いた点を、どう工夫をすると翌日以降の援助をより良いものに発展することができるのか。重要なのは「できなかった」ではなく「今日実践してみて気付くことができた。その気付きを次につなげていこう」とポジティブに変換することである。看護援助を指導する際には、その学生が将来臨床で看護師として患者に援助することにつながっていることも意識している。

技術演習計画の立案

大学内での技術演習計画の立案では、自分たちが実践する技術が、患者にとってどのような意味を持つのか。なぜこの技術を実践する必要があるのか、学習を何に活かしていくのかを学生に意識づけできるように、計画を立案している。演習後にはリアクションペーパーを記載してもらい、演習を通してなにを感じ、気付き学んだのかを確認し、次回以降の演習立案時に、目標や目的に活かしている。

技術演習では、学生が円滑に演習を実施することができるよう教員を配置するように留意しながら演習を組見立てるなど工夫を行ない、他教員から助言をもらいながら立案している。

4. 学習成果

学生から、病態生理や学習内容に対しての質問が積極的に聞かれるようになった。

学生が分からないことなどを質問してくるようになった。

教育活動を通して、学生の態度に変化が現れた(連絡がとれなかった学生が連絡を入れるようになった)。

5. 改善のための努力

限られた実習時間の中で、実習を行なっている担当全学生対し、指導に関わる時間を余裕を持って作ることができるよう、実習を担当くださる指導者と密に連携を取り、時間の確保につとめる必要がある。実習前日に翌日の行動予定表を指導者に相談しながら学生が作成しているが、その中に、学生への指導時間を予め設けておくことで、改善することができると思う。

6. 今後の目標

短期目標

学生が達成感をもって実習を進めることができる。これまで学習したことが、実際の看護で生きる体験を積み重ねることで、学習の成果を実感し、達成感を得ることで、学生が次の学習意欲につなげていけるよう意識して関わる。達成時期は 2024 年 3 月末日。

長期目標

達成感や学習の成果を実感し、実際に学習行動をとることができるよう学生に関わる。短期目標では意欲を引き出し、長期目標では、実行動につながることを目指して関わっていききたい。

【資料】

- 1.シラバス「成人看護学方法論Ⅲ」
- 2.シラバス「成人看護学実習Ⅱ」
- 3.シラバス「成人基盤実習」
- 4.看護学科臨地実習授業評価アンケート集計結果「成人基盤実習」
- 5.看護学科臨地実習授業評価アンケート集計結果「成人看護学実習Ⅱ」
- 6.2022 年度 授業評価アンケート結果「成人看護学方法論Ⅲ」